

〈報告〉

ローマ日本文化会館日本庭園現況調査報告

福原成雄

はじめに

ローマ日本文化会館は1962年、日本政府初の海外における日本文化会館として設立され、現在、海外の中での国際交流基金の最も重要な拠点の一つとなっている。ローマ日本文化会館建物は吉田五十八、日本庭園は中島健によって設計された。吉田五十八は数寄屋造を得意とし、大磯の吉田茂邸や日本芸術院会館の設計で著明な建築家である。ローマ日本文化会館（以下、会館）はコンクリートの外壁による平安時代の寝殿造りを基調にした建築である⁽¹⁾。

中島健（1914～2000）は、花を多用した庭園を国内外で数多く設計した「花の造園家」として知られ、ローマ日本文化会館日本庭園（以下、本庭園）は、中島健が海外で最初に作庭した日本庭園である。その工事期間中に、まさに「花」のインスピレーションを得たと中島健自身が語っている。花を庭園に使ってみたいと思ったのは、本庭園を作るためにヨーロッパに行ったことがきっかけである。独立して5年目を迎え、海外で庭作りをするのも初めてであった⁽²⁾。当時吉田茂元首相に見込まれ自邸の庭園作庭を任されており、その時に本庭園設計、作庭の話が持ち上がり引き受けたようである⁽³⁾。

本庭園の現況調査は、2016年12月にご子息である中島博久氏の推薦で、国際交流基金ローマ日本文化会館より筆者と、辻井博行（株式会社辻井造園代表取締役）に依頼がなされた。現地調査は、2017年1月と6月に、庭園資料収集、地割、庭園構成要素、中島健作庭の石組、視点場の確認、現況の修景に関する問題点、現況測量、樹木、石材調査等を行った。本稿では特に庭園の構成要素と視点場等の調査内容についての報告を行う。

1. ローマ日本文化会館日本庭園の現況調査

1) 現況調査の趣旨

- (1) 本庭園の価値、意義を向上させるための調査、検討を行う。
- (2) 本格的日本庭園としての内容の充実、改善の提案を行う。
- (3) 良好な庭園景観を觀賞するビューポイント（視点場）の設定を検討する。
- (4) ビューポイント（視点場）から、理想的庭園景観の維持を目的とした景観解析を行う。
- (5) 本庭園の実測と平面図の作成

庭園平面図は、吉田五十八作品選集（4）に掲載されている簡易な図面（図-1）しか無く、石組や植栽の配置がどうなっているか、竣工当時からどの程度変更があったかなかったか等を検討し、中島健が思い描いた理想の庭園の姿を見つけ出すため、また、現況の記録保存、今後の修景計画のために正確な現況平面図の作成を行う。

2) 現況調査日程

日程は下記の通りである。

第1回ローマ日本文化会館日本庭園現況調査

2017年1月26日～2月1日

本庭園ガイドツアーに関するワークショップに参加し、本庭園に関する資料収集、植栽に関する現況調査を行った。

第2回ローマ日本文化会館日本庭園現況調査

2017年6月14日～6月20日

現況図作成のための三角測量、規格測量（石材、樹木等の位置関係確認）、今後の修景計画に必要な樹木植

栽のために樹木ナーサリー、会館で使われた石材(ラディコファニ) 調査を目的に行い、新たな植栽樹種検討のために大使公邸、ローマ大学附属植物園を訪問しての樹木調査を行った。

2. ローマ日本文化会館日本庭園の概要

竣工年:1962年

規模:1500㎡

様式:池泉廻遊式(野筋、滝、池)

依頼主:ローマ日本文化会館

設計者:総合庭園研究所 中島 健

1) 本庭園立地

会館は敷地北側にアントニオ・グランシ通りを挟んでローマ大学建築学部が接している(写真-1,2)。文化会館境界には、フェンス、生垣が設けられ、サクラ、マツが配植されている。東側はローマ市の公園に接し、北側の生垣に続いている。南側は崖になっており、崖下はベツレ・アルティ通りに接しておりヴィラ・ジュリア国立博物館を中景に眺めることができる。さらに遠く遠景にボルゲーゼ公園の森を眺望できる、美しい景観に恵まれた場所である(写真-3)。敷地北西側に会館が建ち、建物の東側に斜面地を利用して池泉廻遊式庭園が作られている。会館入口は北側道路からで、入口広場に駐車場、北東側に池を配置し、井戸水を引込みそこから水路で庭園に水を流している(写真-4,5)。

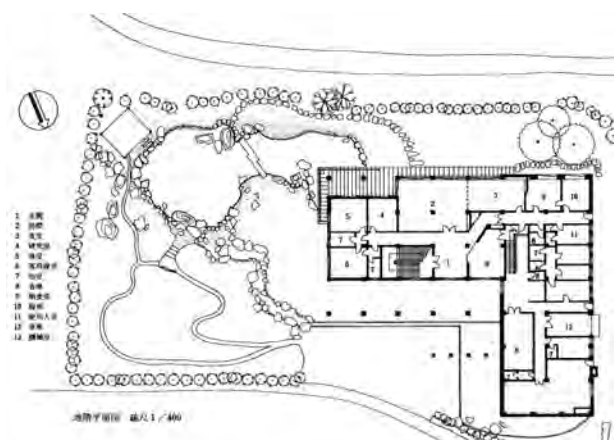


図-1 平面図(吉田五十八作品集より)



写真-1 アントニオ・グランシ通り東側から日本文化会館



図-2 完成模型(会館所有)



写真-2 北側日本文化会館入口



写真-3 ローマ大学建築学部より文化会館を眺める



写真-4 北側日本文化会館入口



写真-5 北側日本文化会館入口広場、駐車場

2) 本庭園地割

本庭園は北側会館水路からの流れを流入口とし、会館に接して地形、方位を生かして滝口を設け、南斜面に向かって6段落ちの滝を築造している。滝に続く南斜面は芝生野筋風にし、園路が北から池に向かって下っている。



写真-6 北側から野筋、池庭、ヴィラ・ジュリア国立博物館の樹林

3. 庭園構成要素の検討

本庭園は池泉回遊式庭園として紹介され、庭園の構成施設内容については、吉田五十八、中島健も詳しく説明されていなかった⁽¹⁾⁽⁶⁾。

また、ガーデンツアーでも日本庭園の構成要素(岩、水、草木と花、橋、灯籠、松)についての解説だけであった。今回の調査で筆者らが明らかにした本庭園の庭園構成要素は、滝、池、巖、荒磯、礼拝石、船着き、州浜、出島、雪見灯籠、岬灯籠、沢渡、石橋、藤棚であり、庭園構成要素位置図を作成し(図-3)た。以下本庭園の固有性について解説する。

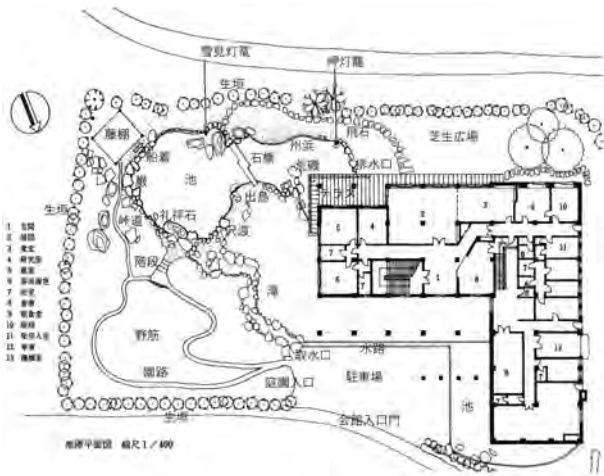


図-3 庭園構成要素位置図



写真-8 滝、下段の水落石、1段目池落ち口、鯉魚石を感じさせる。

1) 滝

滝は南向きの優美な姿で、日中の太陽光を受ける構成になっている。滝は6段で、落差は各々50cm前後で、池に接して滝幅を広くしている。滝の形態はS字型で、滝石組みは立石を使わずに伏石を多用し、落口の水落石も流れに合わせ巧みである。下段の左右の滝添石も見事で、左手の滝添石は鯉魚石(写真-8)を思わせ、龍門瀑を表しているとも考えられる。



写真-9 滝、2段目



写真-7 滝全景 庭園実測中



写真-10 滝、3段目、4段目伝い落ちの滝



写真-11 滝、5段目の水落石(滑滝)、6段目

2)池

池の構成は会館東側南斜面下段に広がり、心字池風、瓢箪型で、会館地下のテラスを池に浮かせて、テラス前左手北側からの斜面を受け、先端に荒磯風石組で景色を作っている。対岸は緩やかなカーブを描いた州浜になっている。池中央には斜めに雁行型の薄い石橋を軽やかに架けている。橋からは雪見灯笼、巖、礼拝石が池に接して配置されている。



写真-12 滝上部、左手立石が遠山石である。



写真-14 会館2階テラスより東側池の姿



写真-13 滝上部、会館北側からの流入口。

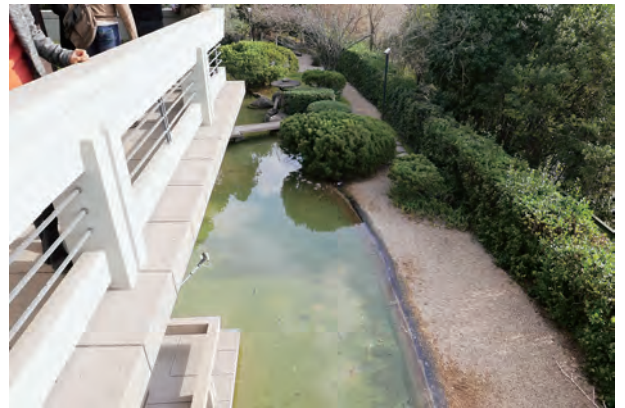


写真-15 会館2階テラスより池、州浜の姿



写真-16 池南側石橋から沢渡、礼拝石の姿



写真-17 池南側石橋から東側の巖の姿



写真-19 巖の石組



写真-18 池東側から石橋、出島、会館の姿



写真-20 ラディオファニ山上の石群

3) 巖(いわお)

『吾妻鏡』に、地中、あるいは、池の付近かと思われるところにではあるが、建久3年(1192)8月27日、僧静玄に巖石を積んで高い丘を作らせることにしたと記録がある⁽⁵⁾。まさにこのような景色を表した枯山水の原型である。中島健は庭石を求め、ローマ近郊からフィレンツェまで探し求め、ようやくラディオファニの山上で見つけている⁽⁶⁾。その場所もまさに巖の様な風景地であった(写真-20)。

4) 荒磯(あらいそ・ありそ)

池際に波によって洗われた姿のように石を荒々しく配石して海の景色を表す手法で、飛鳥時代から作られている⁽⁷⁾。本庭園では北側築山から優美な稜線を池に向かって下ろし、池際から建物側に低く立石を配石して見事な荒磯の石組みを行っている。



写真-21 荒磯

5) 礼拝石(らいはいせき・れいはいせき)

拝石(はいせき)とも呼ばれ庭の役石(平石)である。蓬莱石、三尊石を礼拝する目的で据えられる⁽⁷⁾。本庭園では周囲の景色を楽しむ様に庭の中心に配石されている。池に接し、魚に対する餌場にもなっている。



写真-22 礼拝石



写真-23 礼拝石

6) 船着き

平安時代から船遊びを目的に池岸に作られるようになり、その後、池庭での遊びの景色として作られるようになった⁽⁷⁾。当初は茶室が配置される計画で、茶室に向かう船着をイメージして配石されたと考えられる。



写真-24 船着き



写真-25 船着き

7) 州浜(すはま)

池の水辺に緩やかな勾配で砂利敷きされた護岸である。飛鳥、奈良時代から作られはじめ⁽⁷⁾、池庭の重要な庭園構成要素である。会館建物の直線に対比して緩やかな曲線が軽やかさを感じさせるように造られていたが、池護岸の改修で直線的になっているのが残念である。



写真-26 州浜



写真-27 州浜

8) 出島(でじま)

池に張出すように半島状に作られている。本庭園では荒磯石組との組合せで、お互いを際立たせる構成に造られている。ムゴパイン(Pinus mugo)が成長しすぎて出島の姿を見ることができなくなっている。



写真-28 出島

9) 雪見灯籠(ゆきみとうろう)

笠に積もった雪を楽しむための呼称として、回遊式庭園の池岸に配置される。池に映る姿も美しい。江戸時代ごろから盛んに作られる⁽⁷⁾。

本庭園の雪見灯籠は、庭園完成後、吉田五十八の強い希望で、本庭園建設の協力者である造園家の荒木芳邦氏より寄贈され、当地に運ばれ設置された⁽⁹⁾。非常にバランスのとれた美しい灯籠であるが、池の広さに対して大きすぎ、中島健は配置に相当苦勞したと考えられる。当初、出島の先端に配置されていた岬灯籠が雪見灯籠との関係で現在の場所に移設されている。



写真-29 雪見灯籠

10) 岬灯籠(みさきとうろう)

池岸岬の先端に水辺の添景として配置される。桂離宮の岬灯籠が最初に作られた本歌である⁽⁷⁾。本庭園の出島先端に据えられていたが、現在は州浜と会館の間に移設され、その存在感を失っている。



写真-30 岬灯籠

11) 沢渡(さわたり)

池や流れ、滝口の狭く、浅いところで対岸に渡るために設置される。江戸時代ごろから作られるようになった⁽⁷⁾。実用を兼ねた庭の景色となる添景である。本庭園では、滝落口前に大小の平石を飛石、石橋風に配石した構成が軽快である。



写真-31 沢渡



写真-32 沢渡

12) 石橋(いしばし)

自然石の橋、切石の橋があり、平安時代から用いられている。加工された石橋が設置されるようになったのは桃山時代からで、様々な姿の石橋が作られている。日本で現存する最古の石橋は天龍寺竜門瀑前の自然石の石橋である⁽⁷⁾。短冊型の切石を雁行型にし、池に斜めにかけ渡した配置は空間に緊張感をもたせ、広がりと動きを与えている。



写真-33 石橋

13) 藤棚

室町時代には、貴族が住吉詣、熊野詣を行い山の藤を楽しんでいた。「野田の藤」は小船に乗ってノダフジ (*Wisteria floribunda*) の藤見見物を行なっている⁽⁸⁾。当初は、この位置に茶室が作られる計画であったが、何らかの原因で藤棚に変えられている。結果、本庭園の藤棚は重要な添景で、視点場ともなった。



写真-34 藤棚

4. 中島健の石組

中島健は西方寺庭園、大徳寺方丈、霊雲院、退蔵院、金地院、大仙院庭園の実測を行い、「見ている場所で形や風景が変わる庭の作り方を見つけ、敷地をうまく活用し、自由に変化させて作ることを知った。岩組や石の配置が自然に表現できるようになった。石の配置は、石の持っている質感をバランスがとれるように据え、石を見て、場所を見て、強さ、落ち着きを考え、石はそれぞれ表情や性格、質量、形が違い、そのような違った石をいかに組み合わせられるか、それを扱う人の感覚によっても違い、人に教えられてできるものではない、理論的なものでもない、昔の優れた人の考えを直接見に受けることが大切で、非常に貴重な体験だった。」⁽²⁾と述べている。

会館の石組は、京都での実測で養った中島健の感覚で組

まれ、西方寺の石組にも似通っている。地形を生かした構成、石の選定、配石、バランスは見事である。中島健の石組みは、優しさと品位を感じさせるものである。



写真-35 西方寺庭園の石組



写真-36 会館 中島健の石組

5. 視点場の検討

視点場の条件とは、庭園全景が見渡せる場所、庭園の中心となる場所、庭園景観構成要素である池、滝石組、荒磯、巖、灯籠、樹木等が一体として眺められる場所、庭園景と周囲の風景が一体となっている場所、庭園景と建物景とが調和した場所である。本庭園では下記の4箇所の視点場を選定した(図-4)。

視点場-1は、庭園景全体から庭園外の風景が俯瞰できる。

視点場-2は、本庭園の中心で、庭園景を眺められる。

視点場-3は、庭園景と建物景が仰視できる。

視点場-4は、庭園景と庭園外の景が仰視できる。

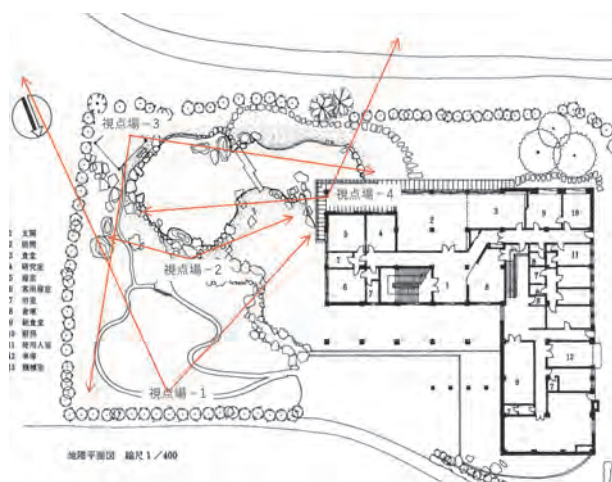


図-4 視点場位置図

1) 視点場-1

視点場である北側野筋上部からは、俯瞰して南に広がる池庭を中心とする日本庭園景観と庭園外の典型的なイタリア、ローマの風景との調和を楽しむことができる構成である。近景、中景、遠景と広がりのある景色を味わうことができる。ヴィラ・ジュリア国立博物館の屋根と遠くボルゲーゼ公園の笠松がひとつながりのように被さっている(写真-37)。

ここでの問題は、池岸のムゴバイン (*Pinus mugo*) の成長によって池の姿が見えなくなっている。池及び池前の広場が狭くなっているので移植し、背の低いハイビヤクシン (*Juniperus procumbens*) に変えるべきであろう。池周囲のオリーブ (*Olea europaea*) は切り戻しをし、半分ほどの高さまで下げることが望まれる。



写真-37 視点場-1

2) 視点場-2

視点場である礼拝石からは、左手の巖石組が池岸から東斜面の豪快な土留め石垣へと続き、滝石組に対峙する庭園の重要な景観ポイントになっている(写真-38)。景色は藤棚に上がる船着の石段、視点場-3となる藤棚を見上げ、そこから右に雪見灯籠を中心とする石組群を眺める。池に浮かぶように対岸へと渡る雁行型石橋へ、雪見灯籠は、橋とのバランスを考えて配置され、石橋は岬を兼ねた出島に渡されている(写真-39)。景色は一転して、滝前の沢渡に繋がっている。ここでの問題点は、荒磯石組、出島の景色が樹木の成長で失われていることである(写真-40)。



写真-38 視点場-2



写真-39 視点場-2



写真-41 視点場-3



写真-40 視点場-2



写真-42 視点場-3

3) 視点場-3

視点場である藤棚からは、池にむかって石段が作られ、池岸に船着きが作られている。右手前の立石から池に向かって巖石組で景色を作っている。また、左手には雪見灯籠を中心とした石組、池中央の石橋、池前方滝落口には左右に大石を組み、滝奥上部の遠山石を感じさせる立石を中心とする奥行きのある滝石組の構成を仰ぎ見ることができる。



写真-43 視点場-3

4) 視点場-4

視点場である会館地下1階テラスからは、会館からの眺めを考えて、石組がされている。左手北側からの斜面を受け、先端には荒磯風石組で海の景色を作り、荒磯に続いて砂利敷きの出島が池に張り出し、出島からは雁行型の石橋を雪見灯籠に向かって対岸へと渡している。雪見灯籠周りの石組みも石橋からの眺めを重視して、灯籠の形態に合わせて組まれている。橋手前のムゴパイン (*Pinus mugo*) は、石橋の軽やかさを消しているので、背の低いハイビヤクシン (*Juniperus procumbens*) への植え替えが望まれる。



写真-44 視点場-4



写真-45 視点場-4

6. 会館日本庭園の現状と課題

1) 古写真と現況比較

(写真-46,47)は、完成後しばらくしての本庭園の状態である。直線的な建物に対して手前州浜の優美な曲線、対岸の北斜面から続く砂利敷きの出島、先端の岬灯籠、会館前には海の景色を表した荒磯風石組、池に浮かぶような石橋、橋挟みの景色は軽快で美しい。さらに石橋奥の藤棚から東斜面の山の景色を表した豪快な石組は会館からの観賞を考えて、対峙しており見事である。そして山に登るかのような小道が景色を雄大にしている。

(写真-48)は、本庭園調査時の写真であるが、樹木が成長しすぎて、当初の庭園景観を失っていることがわかる。さらに、漏水による池改修工事によって州浜護岸が防水モルタルの上に砂利仕上げで直線的になり、州浜の美しさが失われている。このことは、日本庭園で成長する樹木をどのように考えるか、庭園施設の老朽化に対してどう補修するか、維持管理の難しさを示している。海外で作られた日本庭園が同様の状態になっている。



写真-46 完成当時の庭園(写真:日本文化会館より)



写真-47 数年後してからの庭園風景(写真:日本文化会館より)



写真-48 2017年の庭園風景

2) 本庭園ガイドツアーについて

2017年1月27日、筆者もガイドツアーに参加し、イタリアの見学者が庭園にまつわる日本文化紹介、本庭園の解説に熱心に耳をかたむけている姿に、イタリアの人々の日本文化、日本庭園に対する興味の高さを知ることができた。一方で、各種情報から仕入れた日本庭園の姿と本庭園を比較し、四季に応じた植栽樹種の少なさ、庭の規模の小ささ等に物足りなさを感じられていることが分かった。

本庭園見学は無料、申込制(30人程度)、ガイド付きグループツアー時間制(30分程度)で通年公開を行っている。年々庭園見学者が増加し、平成28年度は、4月～10月までの7ヶ月で13,790人が訪れている。

ガイドツアーでの説明内容は、

- (1) 会館と日本庭園についての概要(入口で)
- (2) 桜の木について(桜の木下で)
- (3) 日本庭園について(池を渡る前に)

自然の風景を再構築する考え、「禅」と枯山水、本庭園の池の庭、日本庭園の構成要素について(岩、水、草木と花、橋、灯籠、松等)。

- (4) 会館の建築について(橋を渡り灯籠前で)
- (5) 終わりに(藤棚のしたで)

藤の花、紫色について。

5～10分ほど自由写真撮影時間。

会館で行われるその他各種イベント紹介等である。

7. 現況平面図の作成

2017年6月17日、19日の2日間、会館職員、現地ボランティアの方々と会館建物、滝、流れ、池、石組、園路、石橋、樹木等の位置、形状、寸法等三角測量で実測を行った。帰国して三角測量図と、写真を基に現況平面図を作画しながら(図-5)、なぜこの場所に滝、池、出島、藤棚、荒磯、巖を配置したのか、そのデザインモチーフをどこに求めたのかを考え、さらに中島健が海外で最初に手掛け、10ヶ月間現地に滞在して、作庭した日本庭園に込めた想いを探っていった。

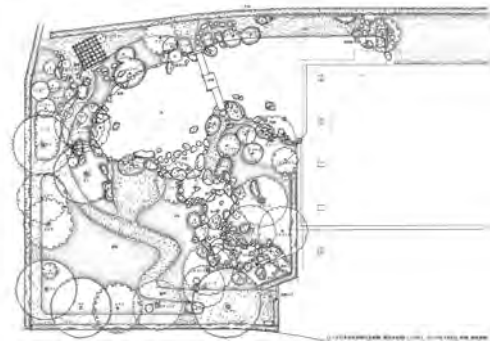


図-5 現況測量平面図

おわりに

中島健の作風は、自然を基本に風情のある庭が特徴である。その土地の地形や風景を活かした庭園構成を考え、石や植物も気候風土にあった現地のものを使い、日本庭園に草花を採り入れた、風情ある花の扱いをする作庭家と知られている。庭園景に相応しい草花の採り入れ方は、特有の表現手法である。本庭園は草花を採り入れた風情に開眼した庭園ではあるが、京都での西方寺庭園、大徳寺方丈庭園、大仙院庭園等の古庭園実測で学んだ伝統的庭園手法を駆使した庭園に仕上げている。滝、池の配置は建築、地形を巧みに利用し、会館建築と庭園が一体となるように配置されている。周囲の景観と調和した滝、沢渡、石橋、荒磯、護岸、巖石組等、見る場所で形や風景が変わり、無限の広がりを感じさせる庭園景観構成は見事である。樹木については当時日本風樹木が入手困難であったことから、当初の樹形を保ち、成長の遅い自然形の美しい樹種を選定基準に、オリーブ (*Olea europaea*)、サルスベリ (*Lagerstroemia indica*)、ゲッケイジュ (*Laurus nobilis*)、サツキ (*Rhododendrom*)、ムゴパイ (Pinus mugo)、トベラ (*Pittosporum tobira*)、オーストリアマツ (*Pinus nigra*)、フジ (*Wisteria floribunda*) 等を配植している。作庭から56年が経過し、植えられた木々も大きく成長して、意図した美しい庭園景観を損ねている。

中島健が海外で最初に手掛け、心血を注いだローマ日本文化会館日本庭園の価値を維持し、向上させる必要がある。そのために、より多くのイタリア人に日本文化と日本庭園技術を伝えられる現地造園技術者の育成、現地造園技術者のための容易に理解できる庭園維持管理マニュアル、庭園保存活用計画の作成が急務である。

補註および引用文献

- (1) 吉田五十八「文化会館の建築について」『国際文化』国際文化振興会,1973年,5
- (2) 鈴木誠・出来正典「上原敬二受賞者に聞く 中島健先生」ランドスケープ研究 日本造園学会,1999年,pp.388-391
- (3) 高須奈緒美「ローマ日本文化会館の庭をめぐる、ある妄想」「花という異文化体験」『イタリア図書』イタリア書房,2017年,54,pp.2-9 55,pp.22-26
- (4) 「日本文化会館 ローマ 1962」『吉田五十八作品集』新建築社,1980年,pp.168-173
- (5) 外村中「『作庭記』にいう枯山水の源流」『造園雑誌』56(1): 1-14,1992年
- (6) 中島健「海外で作る庭 -その苦心のほど-」『庭(特集-外国の中の日本庭園、ガレージと庭、のべだんのすべて』建築資料研究社,1972年,pp.174-178
- (7) 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店,2004年 p.12,p.308,p.262, p.162,p.302,p.282,p.117,p.24
- (8) 飛田範夫『大阪の庭園』京都大学学術出版会,2012年,pp.291-295
- (9) 松永文夫「ローマの猫(4)日本文化会館の成立と日本文化政策-続き-」『イタリア図書』イタリア書房,2013年,pp.26-30

